

八尾町西町におけるまちづくり活動を通じたまちづくり気運の高まりについての考察

まちづくり気運 フォーラム 現場実験
コミュニケーション誌 八尾町

正会員 ○江口久美*
同 三澤茂樹*

0. はじめに

2005 年度、東京大学（以下大学）は富山県富山市八尾町西町の中心市街地を活性化に向けて、西町の将来像を提案しながら、地元のまちづくりへの参画意識を高めるように八尾町商工会から委託され、一年を通して西町まちづくりに関わってきた。本稿では、住民のまちづくり気運に焦点をあて、まちづくり組織を結成する基盤を作るまでに至った過程について省察を加える。

1. 富山市八尾町西町の現況と問題点

西町は富山市南部に位置する八尾町の中でも特に歴史の古い町並みが残る旧町地区の中の一町である。人口 398 人、世帯数 129 世帯で、通り両側に町屋型住宅が連なる町並みである。

町の裏側には日本でも稀有な石垣が連なり、また八尾町全体でも 5 月に曳山祭り、9 月におわら風の盆という大きな祭りを抱えており、ハード面・ソフト面共にまちづくりにとっての資源に恵まれた地区である。

また、おわらの練習等をまちぐるみで行うため、商店会や自治会を中心としてまちの組織がしっかりとしていることが特徴である。特に、商店会の幹部 3 人が、住民のリーダー的な存在である。

そのような基盤を持ちつつも、西町では定住人口の少子高齢化・急激な減少によるまちの活力の低下が起きている。また、商業の郊外化に伴う、西町では商業集積の減少が起きている、西町の活性化は急務である。

2. 初顔合わせワークショップ (05/07/10)

7 月までに行った調査の概要を発表した後、住民に西町の良いところをあげてもらった。

住民に学生の顔を知ってもらい、住民に学生が西町まちづくりに関わることを知ってもらうことで、まちづくり活動を意識してもらうことを目的とした。

そのため、住民が直接意見を述べやすい環境を設けるため、3 グループに分かれてもらい、テーブルごとに意見をまとめた。

これにより、3 人の住民リーダーと学生間のつながりができ、まちづくり活動に能動的に関わるきっかけとなった。一般住民には、まちづくりへの意見の反映のされ方という点から興味を持ってもらうことができた。¹

3. 第 1 回フォーラム (05/10/26・29)

26 日の第一部では、10 月までの調査結果の発表及びそれに基づいたまちづくり 12 のアイデアを発表した。また第二部では、いくつかの提案現場で提案の実験を行った。

大学と住民で西町の問題点と可能性についての考え方を共有し、住民に 12 のアイデアに対して意見を持ってもらい、提案実験により提案を体感することでまちづくり気運の盛り上がりの芽を認識してもらうことを目的としていた。

そのため、第一部後半では、住民側の意見を発表してもらった後、更にアンケートで意見を具体的に回収した。また、第二部では、提案現場で提案実験を体験してもらった。

これにより、住民リーダー3 人は、現場実験により、まちづくり気運を高めてもらうことができた。一般住民には、まちづくりに対して意見を持つことで、まちづくり活動を意識してもらうことができた。

アンケートの回答数が少なかったこと等から判断すると、この時点では一般住民に期待したほどに積極的にまちづくり活動に参加する意識を芽生えさせることができなかった点が課題であった。また、第二部の参加者が第一部に比べて少なかったが、結果的に住民リーダーを中心に、丁寧に現場実験を体験してもらうことができたので、よい成果が得られた。

4. ニシマチ・マチコミ第 1 号 (05/11)

西町まちづくりを行っていくための、都市デザイン研究室と住民間のコミュニケーション誌である。第 1 号には、第 1 回フォーラムの内容の報告が掲載された。また、12 のアイデアに対するアンケートが添付された。

第 1 回フォーラムの内容を伝え、アイデアに対するアンケートを添付することで、第 1 回フォーラムで一般住民に芽生えたまちづくり活動に対する意識を持続させ、更に高めることを目的としていた。

そのため、商工会を通じて全戸に配布し、アンケートを回収した。

フォーラムでの住民のまちづくりに対する意識を再び喚起させることができた。

5. ニシマチ・マチコミ第 2 号 (06/01)

アンケート結果の報告、及び疑問点・問題点に対する

返答を掲載した。

西町まちづくりに対する考え方を住民同士で共有することができた。また、まちづくりに対する気運を持続させた。²

6. 第二回フォーラム (06/02/25)

西町まちづくり全体構想と、アンケート結果に基づき、ブラッシュアップしまとめた 11 の個別プロジェクトの発表のあと、車座談義を行った。

このフォーラムのねらいは、個別プロジェクトの具体的なイメージを住民に示すことで、来年度以降のまちづくりの方向性を住民に認識させ、まちづくり組織設立への気運を高めることであった。

工夫した点は、各テーブルで少人数に分かれ、議論する提案の数を絞り、住民が直接提案に対して意見を述べやすい環境をつくった点である。また、フォーラムの構成を、住民の意見のまとめを行った後、それを受けて住民代表が答弁の形をとるようにした点である。

その結果、住民リーダーの一人からまちづくり組織を立ち上げたいという要望が出るに至った。

課題としては、車座談義のグループ分けで、各グループに様々な年代の住民が混ざらず、まちづくり気運の盛り上がりには水を差した点が挙げられる。これは、フォーラム後のアンケート結果から読み取れる。

7. ニシマチ・マチコミ第3号 (06/03)

第2回フォーラムの内容を報告した。

これにより、まちづくり組織を立ち上げていく気運を

全戸に波及させ、持続させていくことができた。

8. 今後に向けて

全体を通して、住民が自らまちづくりに関して考え、意見を述べる場を設けることが、まちづくり気運を高めるポイントになったと考えられる。また、そうして高まった気運を維持するために、マチコミやアンケート等、住民がまちづくり活動に触れる機会を設けることも、ポイントであったと考えられる。

全体を振り返ると、1年の流れを通じて、住民リーダー3人のまちづくりへの気運を高めて、まちづくり組織を立ち上げるまでにできたことは、大きな成果であったと考えられる。

その一方、一般住民との対話の時間が足りず、彼らの気運を期待していたレベルまで盛り上げることができなかったことが課題である。そのレベルとは、彼らが自主的に能動的にまちづくり活動に関わっていくレベルである。

¹ この後、2005年10月11日～11日に、全戸アンケートを訪問実施した。内容は、西町のお気に入りと家屋の間取り調査である。結果として、大学のメンバーの顔を再認識し、まちづくり活動をうけいれていくきっかけになったと考えられる。

² この後、2006年2月5日に、富山市八尾町観光まちづくり推進協議会により、観光まちづくりシンポが開かれた。西町の1年を通してのまちづくり活動の様子を、八尾全体に発表する内容だった。西町の動きを外部の人々に知らせることで、西町のまちづくり活動を客観的に再認識してもらい、まちづくりの気運を高めることをねらった。結果として、西町の住民リーダーと一般住民に、西町まちづくり活動に対する自らの評価をあげてもらうことができた。

³ この他に、本年度八尾に関わったメンバーは、西村幸夫、中島直人、岡村祐、永瀬節治、大谷剛弘、金宗範、田辺康弘、楊恵亘、後藤健太郎である。

表1 西町における1年のまちづくり活動年表

	初顔合わせワークショップ	第1回フォーラム	マチコミ第1号	マチコミ第2号	第2回フォーラム	マチコミ第3号
年月	2005年7月10日	2005年10月26日・29日	2005年11月	2006年1月	2006年2月25日	2006年3月
内容	調査結果の概要報告、テーブルごとの意見交換。	調査結果報告とまちづくりアイデア発表。現場実験。	第1回フォーラムの報告。各提案に関するアンケート。	アンケート結果の報告、及び疑問点・問題点に対する返答。	西町まちづくり全体構想・個別計画(11のプロジェクト)の発表。車座談義。	第2回フォーラムの報告。
ねらい	住民に学生の顔を知ってもらい、住民に学生が西町まちづくりに関わることを知ってもらうことで、まちづくり活動を意識してもらう。	西町の問題点と可能性を住民と共有し、12のアイデアに対する意見をもらい、住民が実際に提案を体験することで、まちづくり気運の盛り上がりの芽を認識してもらう。	第1回フォーラムの内容や様子を伝え、西町全住民が大学の活動に対する理解を深め、住民の提案に対する意見を知ることによって、まちづくり気運を持続させる。	住民が提案に対する理解を深め、西町まちづくりに対する考え方を住民同士で共有することで、第2回フォーラムに向けてまちづくり気運を高める。	第1回フォーラムで提示したアイデアをブラッシュアップし、最終的な形で提示する。住民と学生が意見交換し、提案に対する理解を深める。西町まちづくり組織を立ち上げる気運を高める。	まちづくり気運を持続させる。
技法	大学による発表の後、住民に3グループに分かれてもらい、テーブルごとに発表する。	大学による発表の後、住民側が各提案に対する意見を発表し、アンケートで回収。現場実験。	商工会を通じて、マチコミを全戸に配布。アンケートで意見を回収。	商工会を通じて、マチコミを全戸に配布。	各テーブルで少人数分かれ、議論する提案の数を絞り、住民が直接提案に対して意見を述べやすい環境をつくった。フォーラムの構成を、住民の意見のまとめを行った後、それを受けて住民代表が答弁の形をとるようにした。	商工会を通じて、マチコミを全戸に配布。
成果(住民リーダー3人)	学生とのつながりができ、まちづくり活動に能動的に関わるきっかけとなった。	現場実験で、提案の効果を体験してもらい、まちづくりへの気運を高められた。	一般住民のまちづくり気運を再確認してもらった。	一般住民のまちづくり気運の具体的な内容を認識した。	まちづくり組織を立ち上げたいという要望が出た。	まちづくり組織を担っていく気持ちを追認してもらうことができた。
成果(一般住民)	西町に対する愛着・造詣をより深め、まちづくりに意見の反映される方という点から興味を持ってもらうことができた。	まちづくり活動を意識してもらうことができた。	参加できなかった住民もフォーラムの内容等を知ることができた。提案に対して意見を持ってもらうことができた。フォーラムで芽生えたまちづくりに対する意識を再び喚起した。	西町まちづくりに対する考え方を住民同士で共有することができた。まちづくりに対する気運を持続させた。	沢山の意見が出され、来年度以降のまちづくり活動を進める上での大きな参考となった。提案に対する理解・愛着が深まった。アンケートの回答数が第1回フォーラムと比べて増加したことから、まちづくりに活動に能動的に参加する意識が高まったことが分かる。	まちづくり組織を立ち上げる気運を、波及させることができた。
課題	まちづくり活動が具体的にどのようなものかを示せなかった。	積極的にまちづくりに活動に参加する意識を芽生えさせることができなかった。これは、アンケートの回答数が少なかったことからわかる。	まちづくり気運がどのようになっているか、確認できなかった。	第2回フォーラムの内容を事前には伝えることをしなかったため、まちづくり気運を盛り上げられなかった。	車座談義の時間が少なく、議論が消化不良のまま終わり、若い世代の参加が少なかった点で、まちづくり気運の盛り上がりには水を差した。	その後、まちづくり活動がどのように進んで行くかを確認できなかった。